児童生徒の心を動かす道徳授業

平成１６年９月２７日(月)
埼玉越ヶ谷小　広瀬仁郎

◇はじめに
学習指導要領の一部改正
（１）基準性の一層の明確化

（２）「総合的な学習の時間」の一層の充実

（３）「個に応じた指導」の一層の充実

１．道徳の授業づくり－基本の再確認－
（１）カウンセリングマインド

（２）子どもの発言の取り上げ方

（３）子どもの発言の生かし方

光る発言の共有化　別添資料１

話し合いにおける教師の役割

２．道徳の時間のねらいと特質
（１）補充・深化・統合

（２）道徳的実践力

（３）道徳的価値の自覚
①

②

③

３．道徳の授業の効果を高める　－評価の充実－
－子ども自らが成長を実感するために－

道徳の時間の評価は、その指導によって一人一人の生徒がどのようにその時間のねらいに迫れたかを理解することから、改めて学習指導過程や指導方法について検討し次の時間の指導に生かすことができるものでなければならない。したがって、学習指導過程や指導方法の改善に役立つ多面的な評価を心掛ける必要がある。
（中学校解説書Ｐ１１５）

道徳の時間は、児童の人格そのものにはたらきかけるものであり、その評価は難しい。しかし、可能な限り、児童の変容を確かめる手立てを考え、それに基づいて道徳の時間を改善していくことは教師の義務である。
（小学校解説書Ｐ１１２）

道徳の時間の評価は、子どもの人間的な成長を見守り、よりよく生きようとする努力を見取り、勇気づけていくものでなければならない。そのためには、子どもが自ら成長を実感でき、これからの課題や目標が見つけられるような工夫をしていくことが大切である。

子どもの評価力を支える教師の力を高める

（1）　事前の段階での評価（子どもの興味・関心を高める授業の構想）

事前に子どもの実態把握を行うと共に、主題に対する子どもの意識を高め、授業に向かっての準備状態をつくる。

□
□
□
□

（2）　授業時の評価（授業時における子どもの活動への対応）

＊授業時における子どもの評価力を高めるための観点

□
□
□
□
□

＊ 話し合いをねらいに向かって深めるために

学　習　活　動	予想される児童（生徒）の反応	指導上の留意点（＊評価）

話題（問いかけ）

・子どもから何を引き出したいのか
・子どもの考え方・感じ方をどのように高めたいか。（求める子ども像）

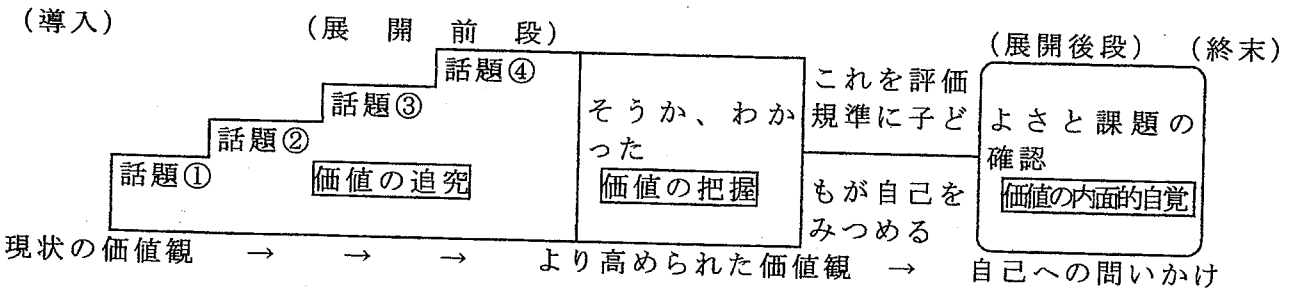
これに気づかせるためにどのような働きかけをするか。
高めたい考え方・感じは出たか。出ない場合どうサポートするか。

話題①の評価が定まらなければ、話題②へは行けないはずである。

＊資料分析の確かさが決めてとなる

＊　授業の中での子どもの学び方

話題に対して自らの考えをもつ　→　その考えを語る　→　友達の考えに耳を傾け、自分の考え方との相違を明らかにする（補充）　→　友達の多様な考えにふれ、当初の考えを練り直す（深化・統合）



各段階における子どもの自己活動（小学校高学年、中学生の例）

導入	・今日は、何をやるのかな。（期待・関心） ・この人の生き方をこの資料で考えていくんだな。（資料追究ための観点把握） ・このことは、自分にかかわる大事なことだぞ。真剣に考えよう。 （主題と自己とのかかわり）
資料提示	・資料の中身をくわしく知ろう（資料の内容把握） ・ここでは、こんな点について考えを深めていく必要があるぞ。（話題の把握） ・みんなは、どんな点に目をつけたのかな。よし、みんなとここの主人公の気持ちや考えを追究していこう。（話題の共通化）
展開前段	・ああ、主人公がこういう考えになったのも無理はないな。その気持ちよくわかる。（共感） ・うん。でも、待てよ。はたしてこのような考えでよいのだろうか。（葛藤） ・いや、この考えでは人間としての誇りが許せない。こういう生き方をしていきたい。（覚醒） ・確かに、この生き方でよかったんだ。今、心の充実を感じている。（納得） ・話し合いをとおしてこういう生き方が大切だなとしみじみわかった。（価値の把握）
展開後段	・自分ははたしてこのような生き方（ものの見方、考え方、感じ方）をしてきただろうか。そういえば、以前こんなことがあった。（経験や体験の想起） （よさ）あれは価値あることだったじゃないか。これこそ本来の自分の姿だ。これからも意識して伸ばしていこう。 （課題）あれは、まずかったな。やはり、人間としてこのように生きたい。そのためには、この点が課題になるな。 自己への問いかけ
終末	・自分もこうした生き方ができる人間になってみたい。今、心の中にあるものを是非実現していきたいな。（価値への憧れ　未来を拓く）

このような子どもの内面活動が生じなければ、道徳授業の指導の効果は期待できない。

各段階において、内面活動が高まるように、心に響く指導方法を工夫し、見届けながら（評価）指導を深めていく必要がある。（指導と評価の一体化）

（3）授業後の評価（指導課題の設定とその後の見守り）

□

□

□

4. 魅力的な道徳授業を創る工夫　－　道徳の授業を拓く７つのアプローチ　－

（1）資料のジャンルを多様に広げる

ア　ローカルな教材（資料）
イ　フレッシュな教材（資料）
ウ　パーソナルな教材（資料）

（2）指導体制に厚みを持たせる

①校長、教頭の参加
②他の教師との協力的指導
③保護者や地域の人々の積極的な参加や協力（道徳教育として）

（３）指導方法を多様化する

＊何でもありきの道徳授業への警鐘

＊ストライクゾーンを外さない中での創意工夫

（４）学習の場や時間の設定を工夫する

（５）他の教育活動と響き合わせる

心のノートの活用

（６）家庭や地域社会との連携を深める

（７）学習集団を多様に生かす

多様な学習集団を生かす工夫
子どもの学習集団については、学級内でテーマ別グループ等をつくることや、ときには、学級の枠を越えることも考えられる。例えば、学年合同で授業を行い、テーマ別グループに分かれて話し合うことによって、子ども同士の学び合いの幅を広げることができる。
道徳教育推進指導資料　小学校「心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開」文部科学省 P45 より

５．コース別道徳授業について（越谷市立越ケ谷小学校の実践例）

別添資料２

◇おわりに

資料1

ノーベル化学賞 田中耕一さん

小学4年の時の水彩画「海ていたんけん」。田中さんは、海底をゆく「くじら号50」の運転手として描いている

豊かな発想伸ばした先生

「雪が降ってるみたい」。ビーカーに見入っていた「耕ちゃん」がつぶやいた。田中さんが富山市立八人町小学校4年の時、理科の授業でのことだ。

ホウ酸を水に溶かした後、冷やして再び取り出す実験の最中、浮かんできた白い結晶を「雪」と表現した。「発想の豊かな子でした」と、4年から卒業まで担任だった澤柿教誠さん(66)は懐かしそうだ。

3カ月後。澤柿さんを驚かせることがあった。水蒸気に試験管をかざして水滴を作る実験で、「あぁ、ホウ酸と同じだ」と田中さんが小さく漏らした。「前の実験と結びつけて、気体から液体、固体への変化をイメージでつかんでいた」

そうした考え方ができる子どもはそうはいない。澤柿さんはその場で、ホウ酸の実験を再び見せて、田中さんが気づいたことをクラスの全員が理解できるよう教えたという。「何を言ってるの」といぶかる彼への視線が、「耕ちゃん、すごい」に変わった。

小学生時代。大阪万博会場を訪れた田中耕一さん＝家族提供

同校は子どもの直感を大事にしようと、創造性を育む授業を探っていた。理科教育にも力を入れ、澤柿さんは放課後、理科準備室に残ることが多かった。田中さんは部屋に来ては、仲間と「ニワトリ自動エサやり機」を作ったり、実験の準備を手伝っていた。休み時間は本を読み、船や飛行機の紙細工を作る物静かな一方で「自分の考えを持っている子」とみていた。

その自分の道を貫いて大きな成功を収めた教え子。今、澤柿さんは「耕一君にありがとうと言いたい。30年前の授業は間違っていなかったとわかった。子どもと一緒に学ぶ気持ちを、今の先生たちも大事にしてほしい」としみじみと話す。

楽しく実験「耕ちゃんすごい」

試験終了10分前。さっと立ち上がり、教室を出て行こうとした生徒がいた。

田中さんが県立富山中部高校の2年生。化学の定期試験だった。

「もう10分おれよ」。担任で試験監督をしていた高井進さん(71)がとがめた。白紙で出すなんて、と思い机を見下ろすと、答案はきちんと書かれていた。

東北大工学部への進学希望を話す田中さんに、高井さんは「やめとけ、無理だ」と言った。発奮させるためだった。「僕は行く」と、案の定譲らない。「なら行け」と応援した。

その意志の強さ。「田中君はやりたいことをしっかりもっていた。それは恐らく、幼いころの教育でつかんだものなのでしょう」

資料2

コース別による「道徳の時間」の構想

越ヶ谷小学校　第3学年

基本的な考え方

1、これまでの道徳の授業の殻を破る授業

学習指導要領改訂では①体験活動を生かした心に響く道徳教育の実施　②家庭や地域の人々の協力による開かれた道徳教育の充実　③未来に向けて自らが課題に取り組みともに考える道徳教育の推進を基本方針としている。これに伴い、「心に響き、共に未来を拓く道徳授業の展開」（文部科学省）には、これまでの世の中の動向、国の答申等を具現化した従来の範疇にない画期的な提言がなされ、今、道徳教育が大きく変わる転換期であると言える。

そこで、本校が今まで総合的な学習の時間で培ってきたことを生かした道徳の授業はできないかと考え、総合的な学習の時間での体験的な学習を道徳の時間の話し合いに生かす工夫や、学習集団を多様化し学級の枠を越えたコース別グループの授業や子どもの興味・関心やニーズに応じ資料が選べる授業、指導体制の充実を図り地域の人材の活用や教師間の協力的指導など新しい道徳の時間の構想を図ってきた。もちろん、すべての道徳の時間でこうしたコース別の授業を行うわけではない。基本的には道徳の授業は学級単位行っているが、総合的な学習の時間の分野と関連が深い主題を扱うなど学級の枠をはずした方が有効である場合に限定した上で、学期に一回程度行うことにした。

2、総合的な学習の時間と響き合う道徳の授業

道徳の時間と総合的な学習の時間は、いずれも子どもが自己の生き方を考える時間として共通の方向を担っている。総合的な学習の時間での体験的な学習を主題とのかかわりで問い直し、心に響く豊かな体験として一層内面化できるように、道徳の時間の話し合いに生かす授業を進めてみることにした。

子どもたちは総合的な学習の時間で郷土を調べる活動で「越谷のすてきはこれだ！」というテーマで、越谷の素敵な物を探す活動をしてきている。そして、越谷に住む人々の願いや思い、伝統的な行事のすばらしさが分かってきたところである。この時期に道徳の時間で郷土愛を扱うことにより、自分たちの住むふるさとを大切にしていこうとする心情を深めることができるであろうと考えた。

このとき、体験したときの気持ちなどを重ねやすい資料を授業で活用したり、体験したときの考え方、感じ方などを効果的に引き出す発問を工夫したり、実感を高める体験的な活動を授業の流れの一部に取り組んだり、体験したときの気持ちを引き出す表現活動などを充実させたりして授業に取り組むことにした。

3、学習集団を多様にする授業

学年全体で総合的な学習の時間に共通体験をし、自ら課題を設定し、同じ課題同士で学級の枠を超えてグループを作り調べ活動をしてきた。そのテーマ別グループに分かれて話し合うことによって、子ども相互の学び合いの幅を広げることができると考えた。

本校では、全校縦割りによるふれあいグループによる活動を実施したり、総合的な学習の時間においては学年全体で取り組み学級の枠を超えたグループで活動したりしている。そのため、どの教師とも気軽に話ができ、誰とでもグループが作ることができる。このような下地があるので今回のような活動を組むことができるのである。

4、指導体制の充実を図る

学級担任に、本学年の初任者指導教師と校内における少人数指導体制の教師が加わって、総合的な学習の時間の活動等に協力して児童の指導にあたっている。こうした指導体制を道徳の授業に生かす

ことにより、児童一人一人の思いに沿った授業・実践力を培う授業が展開できると考え、６人の教師によるコース別の道徳の授業を実施するに至った。

さらに、家庭や地域社会との連携を生かした道徳教育として、総合的な学習の時間の郷土分野で地域に出て調べ活動をした体験を、道徳の授業にいかすためには、講師を地域から招いて行うとよいだろうと考えた。

5、内容項目「郷土の文化と伝統を大切にし、郷土を愛する心を持つ」に関する児童の実態

現代社会は、マスコミやマスメディアの発達によって生活様式が画一化し、地域性が失われつつある。また、あらゆるものに対して、新しいものが好かれ、ただ旧式で非能率的という理由だけで、伝統ある物・歴史的に価値のあるものを軽んじる傾向がある。これは目先の利益だけを追い求めている現代人の心の貧しさに他ならない。人間が人間らしく生きていくということは、自分が育った郷土の目に見えないよさを自覚し、自分はそれに支えられて育ったことに気づき、それを大切にしようとする心を育てることである。

現代の子どもたちには、自分たちが育った郷土への興味・関心をもち、そのすばらしさを自覚し大切にしていこうとする姿はほとんど見られない。これは、興味・関心を持つ機会も少なく、郷土のすばらしさに感動する心のゆとりがないからであると言われている。

しかし、本校の子どもたちは、３年前期の総合的な学習の時間において郷土の自然・文化・伝統にふれ、郷土のよさを見つける活動を行っているので、郷土への関心を持ち始めたところである。これらの体験をいかすことにより、道徳の時間の授業のねらいや展開が可能になり、話し合い活動が深まると考えた。さらに、総合的な学習の時間の活動中に見つけた郷土の良さを、心のノートＰ84.85の「とっておきの場所・人」に記入させて、道徳との関連を深める素地をつくってきた。

資料は、郷土に親しむ資料「どひょうだわら」「越谷の桃」、郷土のよさを守る資料「祭り太鼓」「蔵造りを見上げて」、より良い郷土をつくる資料「心の花たば」の５つを選んだ。

⑥総合的な学習の時間「越ヶ谷のすてきはこれだ！」と道徳資料との関係

グループ	総合的な学習の時間の活動	道徳	担	場	ゲスト・資料
越谷だるま17人 越谷雛人形5人 桐箪笥・桐箱7人	越谷だるま、越谷雛人形、桐たんす桐箱についてその特徴や作り方、作っている人の工夫や苦労を職人さんに会って話を聞いたり、疑問に思ったことを質問したりした。 また、実際にだるまをつくったり桐の板にかんなをかけたりする体験した。	どひょうたわら	関悦子	3の1	水引を作っている人 （身近に私たちの誇りに思う人がいる）
クワイ 20人	クワイについてその特徴や育て方をクワイ農家の方に会って話を聞き、クワイ畑を見学した。 また、成長の様子を調べるために、実際にクワイを植えて育てながら観察している。越谷で作っているほかの農作物についても調べた。	越谷の桃	亀田和代	3の3	資料に出てくる主人公の子孫のＶＴＲ（土地を上手に利用して作物を作る苦労）
古い木 13人 夢空間（町つくり）3人	商工会の「夢空間」という店に行き、店ができた訳や、越谷の新しい街づくりについて調べた。 越谷に残っている古い木（巨木）をさがし、その木を観察し、木の大きさを体感したり、なぜ今まで残っているかを調べたり、スケッチしたりした。欅・たぶ・藤・桜・銀杏等	心の花たば	清水眞知子	3の2	商工会で町おこしに取り組んでいる人 （子供たち期待する事や町おこしに対する考え）
蔵6人 古い道具4人 古い建物 6人 神社・寺5人	越谷に残る古い町並みに興味を持ち、蔵の中を見学したり、蔵のよさを調べたり、持ち主の蔵への思いを聞いたりした。 また、越谷に１００年以上前から続いている家を訪ねて、建物や越谷について話を聞いた。古い建物の中に残る古い道具を調べた。	蔵造りを見上げて	佐藤善英	商店街の蔵の中	蔵の持ち主 （どういう考えで蔵を残しているのか。蔵に対する思い）

越谷太鼓 12人 手焼きせんべい 13人 越谷の伝統菓子 5人	越谷太鼓の方に、太鼓の構造やたたき方、なぜ太鼓をやっているか、太鼓を続ける苦労などを質問し、太鼓のたたき方を教えていただき、簡単な曲がたたけるようになった。 昔からある手焼きせんべいと和菓子の作り方を地域のお店の方から調べたり、せんべいや菓子に対する思いを聞いたりした。	祭りだいこ	酒井豊子	視聴覚室	せんべいやの後継者 （伝統を守る思いと工夫） 和太鼓

⑦成果と課題

資料「蔵造りを見上げて」は、学習の場を商店街に残る蔵の中にうつして実施した。資料は3年生にとってやや難しい内容であったが、実際の蔵を見て蔵の雰囲気を味わい本物を見ながら進める事ができたので理解が深まった。さらに、このコースの子どもたちは総合的な学習の時間に蔵や古い建物や昔の道具等に興味を持ち調べているので興味・関心が高く、質の高い活発な意見が出され、**蔵の持ち主の話に共感し、蔵など地域の文化財を大切に保存したいという気持ちが生まれた。**

資料「祭りだいこ」は、視聴覚室で行った。和太鼓を調べた子どもたちは、主人公が太鼓をたたくときの爽快感や苦労などに共感することが容易であった。また、**伝統を受け継ぐことの意味を深く考えることができた。**

資料「越谷の桃」は、主人公の子孫が今でも果物作りを続けていることに驚き、土地にあった作物作りや、より良い作物を作る苦労などを慈姑つくりと**比べながら考えることができた。**

資料「土俵たわら」では、身近にすばらしい技術を持った人がいることを知り、伝統を守って仕事をすることについて、**自分の体験と重ね合わせて考えることができた。**

資料「心の花たば」では、自分の住む越谷をどんな町にしたいかを、今まで調べた越谷のすてきなものを守りたいという気持ちをいかして**考えることができた。**

この授業で子どもたちは、地域には多くのすばらしい人がいることに気づき、人から学ぶ喜びを経験させ、**その人の生き方や優しさに触れることができた。**そして、地域の人の子どもたちへの思いを知り、**人と人のかかわりを真剣に考えることができた。**

そして、4年間にわたって展開される総合的な学習の時間の比較の基礎となる郷土越谷の環境、歴史、文化、社会、人などのいろいろな要素に目を向ける事ができた。

このように、同じねらいやテーマを持った学習を、総合的な学習の時間から道徳の時間へと発展させることにより、道徳の時間と総合的な学習の時間の両方のねらいである**自分たちの住むふるさとを大切にしていこうとする心情をより深めることができた。これは自己の生き方に大きく影響を与えていると考える事ができる。**

『心のノート』を、こう活用する

道徳の時間の一部で補助的に活用する

広瀬仁郎

「心のノート」は、ア、子ども一人一人が自ら学習するための冊子、イ、子どもの心の記録となる冊子、ウ、学校と家庭との「心の架け橋」となる冊子という三つの特徴がある。すなわち、このノートを活用する主体は子どもであり、子ども自らが自らの意思で自律的に進めていくことを基本としている。しかし、与えっぱなし、配りっぱなしでは、子どもの心に火はつかない。子どもが自ら継続的に活用するためのきっかけや動機付けを図っていくための教師の意図的な仕掛けが重要であると考える。

ここでは、教育活動の全体で活用することを基本としつつも、補充、深化、統合するかなめとしての道徳の時間を中心に活用していく方法についてまとめたい。

もちろん、道徳の時間のメイン教材として丸ごと使うという意図ではなく、一部を補助的に活用していくという、いわば、つまみ食いを想定しながら関心を高め、繰り返し使っていくことにより、子どもの自律的な活用へといざなうことを意図してのものである。

1 道徳の時間での活用

① 導入で活用する方法

課題を投げかけることで、主題への興味・関心を高める。さらに、この資料をどう読むか、話合いの視点をどこにおくか明確にした上で取り上げる資料へといざなう。

例えば、五、六年生用「心のノート」19ページの「自由は、自分勝手とはちがう」を読み、自由と自分勝手とはどう違うのか、この資料「うばわれた自由」で考えてみましょうと問いかける。

② 展開の前段で活用する方法

例えば、資料での追究や話合いを行う際、内容をより深めるために参考的に並列して活用していく。

③ 展開の後段で活用する方法

資料による話合いの後、学んだ価値にかかわって自分自身をみつめる際に用いたり、事前に書き込んである主題にかかわる体験等を活用する。

例えば、四年生の資料「ほっといて」では、困っている人を見かけたとき、親切にできたことを「心のノート」の41ページに書き込む。

④ 終末で活用する方法

本時のまとめとして、「心のノート」を見せたり、主題の内容が整理されたページを広げて価値をあたためたり、印象づけたりする。

2 道徳の時間の事前や事後での活用

① 事前の学習で活用する方法

道徳の時間の前に、「心のノート」の関連するページに書き込ませたり、学級で話題にしたりすることにより、意識を高めたり、学習への動機付けを図っていく。

例えば、三、四年生用「心のノート」36ページの「クロスワードパズルにチャレンジしよう」を朝の会の時間で、グループで解き合う。完成した後、教師が「あいさつのことばっていろいろあるね。こういう言葉をかけられるとどんな気持ちになるかな。四時間目の道徳の時間で考えていきましょう。」と予告をし、課題意識を高めていく。

② 事後の学習で活用する方法

学習の発展として、高まった思いを形に表していくための体験や活動をしていく。

例えば、家族愛を主題とした授業を行った後に、五、六年生用「心のノート」91ページの家族新聞を作成する。

3 トータルな活用

自己課題をもち、子ども自身が自ら調べ、追求し、課題解決をしていく過程をサポートする方法

心のノートをメインに課題解決学習の一環として副読本の資料を関連づけながら、総合単元的な道徳学習を構想する。（例）五、六年用「心のノート」

―目標に向かって生きる―

一次	「夢に届くまでのステップがある」を学習し、自分の夢を書く。（14ページ）
二次	目標に向かって生きる「イチロー」について調べる。（15ページ少年時代の写真）
三次	「イチロー」（副読本あるいはインターネット、雑誌、本等から資料を自作）の夢の実現に向かって努力する生き方を話し合う。（道徳の時間）
四次	イチローのほか、自分が学びたい人物の夢について取材したり、調べたりする。（16ページわたしが学びたい人物）

（越谷市教育委員会指導主査）